

明治 15 年に刊行された統計年鑑の序文のテキスト化の試みプラスアルファ

1 はじめに

現行の日本統計年鑑の源流となる総合統計書で、タイトルに初めて「統計年鑑」の用語を含むものは明治 15 年（1882 年）に刊行された「統計年鑑」です¹。同書は、21 分野²（279 表）で構成され、本文 678 頁に及びます。ちなみに、令和 5 年（2023 年）に刊行された第 72 回日本統計年鑑は、30 の分野（542 表）で構成され、本文 760 頁となっています。本稿では、明治 15 年に刊行された「統計年鑑」の序文のテキスト化を試み、その序文から学んだことを紹介します。

○明治 15 年に刊行された「統計年鑑」の表紙・序文



【画像】統計図書館蔵書

2 明治 15 年に刊行された統計年鑑の序文のテキスト化を試みるも… 2 勝 1 敗

まず、明治 15 年に刊行された「統計年鑑」の序文を見たところ…いきなり漢字まみれのため、難読漢字を調べやすくするため、序文の画像に係る PDF ファイルを書出機能（読取機能）によりテキスト化を試みたところ、原文を縦書きとして認識せず、文字化けのオンパレードのため、断念。次に、総務省統計局百年史資料集成（総記下）に所収の同書の序文の画像に係る PDF ファイルを書出機能（読取機能）によりテキスト化を試みたところ、冒頭の序文 1 頁を縦書きとして認識せずテキスト化に失敗…、序文 2

1【参考】統計年鑑の沿革

現行の日本統計年鑑の源流となる総合統計書は、辛未政表、壬申政表、日本政表などを経て、明治 14 年（1881 年）5 月に太政官に統計院が設置されると、「統計年鑑」の編纂に着手し、明治 15 年に初回が刊行されました。書名に初めて「統計年鑑」を含む総合統計書の誕生です。これを第 1 回として起算し、昭和 16 年刊行の「第五十九回大日本帝国統計年鑑」（戦前における最後の刊行）まで、通算 59 回刊行されました。戦後は、昭和 24 年（1949 年）に「第 1 回日本統計年鑑」として刊行が再開され、現行の「日本統計年鑑」に至っています。

【参考WEBサイト】

(現行の日本統計年鑑について)
・統計局HP>統計データ>日本統計年鑑 https://www.stat.go.jp/data/nenkan/index1.html
(日本統計年鑑の沿革)
・統計局HP>日本統計年鑑>本書の内容>「日本統計年鑑」120 回の歩み https://www.stat.go.jp/data/nenkan/pdf/120ayumi.pdf
・統計局HP>統計 Today No. 45 https://www.stat.go.jp/info/today/045.html
(統計年鑑編纂の決議に係る統計院誌明治 14 年 6 月 21 日の記事)
・統計院誌 https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/3023638/1/5 (国立国会図書館デジタルコレクション)
・統計図書館コラム【ピックアップ・コラム】参考資料【号外】【作業用資料】統計院誌テキスト版（暫定版）（2 コマ） https://www.stat.go.jp/library/pdf/pgogai0202.pdf (統計局HP)
(統計院の創設当初の課別の所掌事務に係る統計院誌明治 14 年 6 月 28 日の記事)
・統計院誌 https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/3023638/1/6 (国立国会図書館デジタルコレクション)
・統計図書館コラム【ピックアップ・コラム】参考資料【号外】【作業用資料】統計院誌テキスト版（暫定版）（3～6 コマ） https://www.stat.go.jp/library/pdf/pgogai0202.pdf (統計局HP)
(統計院の創設当初の課別の所掌と担当課長の一覧表)
・統計図書館コラム【人物編】No.0002 大隈重信（2-2 設立当初の統計院の組織） https://www.stat.go.jp/library/pdf/column0002.pdf (統計局HP)

² 21 分野の内訳：統計局HP>日本統計年鑑>本書の内容>「日本統計年鑑」120 回の歩み
<https://www.stat.go.jp/data/nenkan/pdf/120ayumi.pdf>

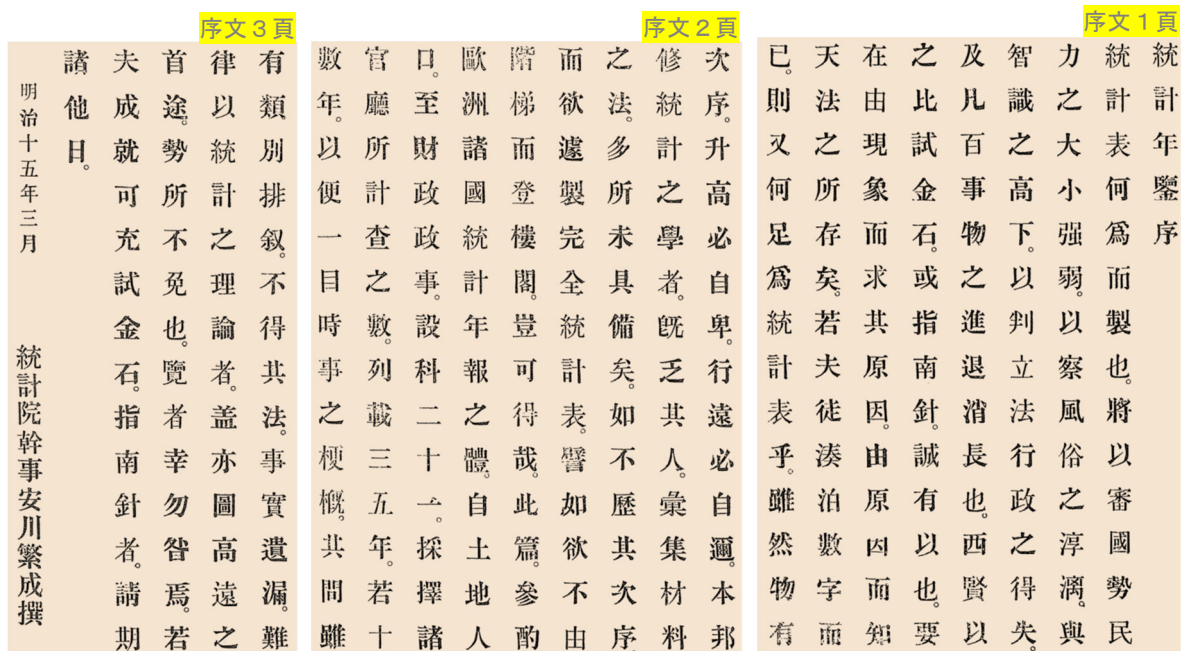
頁と3頁は、縦書きと認識し、テキスト化に成功しました(2勝1敗)。テキスト化に失敗した1頁めについては、短文であるため、デジタル時代に逆行して躊躇なくアナログ的手法(手入力)を選択しました。

3 明治15年に刊行された統計年鑑の序文のテキスト化の結果

明治15年に刊行された統計年鑑の序文のテキスト化に用いた原文の画像とテキスト化の結果(補正前・補正後)は、次のとおりです。

【原文】

○明治15年に刊行された「統計年鑑」の序文(総務省統計局百年史資料集成(総記下)所収)



【画像】統計図書館蔵書

【テキスト】(補正前) ※原文では旧字体であってもなるべく新字体でテキスト化しました。赤字は、誤読してテキスト化されたものです。

統計年鑑序

統計表何為而製也。將以審國勢民力之大小強弱。以察風俗之淳漓。與智識之高下。以判立法行政之得失。及凡百事物之進退消長也。西賢以之比試金石。或指南針。誠有以也。要在由現象而求其原因。由原因而知天法之所存矣。若夫徒湊泊數字而已。則又何足為統計表乎。雖然物有次序。升高必自卑。行遠必自邇。本邦修統計之學者。既乏其人。彙集材料之法。多所未具備矣。如不歷其次序。而欲遽製完全統計表。諷占如欲不由階梯而登樓閣。豈可得哉。此篇。參酌欺歐洲諸國統計年報之體。自土地人口。至財政政事。設科二十一。採擇諸官廳所計查之數。列載三五年。若十數年。以使一目時事之梗概共間雖有類別排叙。不得共法。事宜遺漏。難律以統計之理論者。益亦圖高遠之首途。勢所不免也。壺者幸勿咎焉。若夫成就可充試金石。指南針者。請期諸他日

明治十五年三月 統計院幹事安川繁成撰

【テキスト】(補正後) ※黄色のマーカーを付した文字は、誤読を補正したものです。

統計年鑑序

統計表何為而製也。將以審國勢民力之大小強弱。以察風俗之淳漓。與智識之高下。以判立法行政之得失。及凡百事物之進退消長也。西賢以之比試金石。或指南針。誠有以也。要在由現象而求其原因。由原因而知天法之所存矣。若夫徒湊泊數字而已。則又何足為統計表乎。雖然物有次序。升高必自卑。行遠必自邇。本邦修統計之學者。既乏其人。彙集材料之法。多所未具備矣。如不歷其次序。而欲遽製完全統計表。譬如欲不由階梯而登樓閣。豈可得哉。此篇。參酌欺歐洲諸國統計年報之體。自土地人口。至財政政事。設科二十一。採擇諸官廳所計查之數。列載三五年。若十數年。以便一目時事之梗概共間雖有類別排叙。不得其法。事實遺漏。難律以統計之理論者。益亦圖高遠之首途。勢所不免也。覽者幸勿咎焉。若夫成就可充試金石。指南針者。請期諸他日

明治十五年三月 統計院幹事安川繁成撰

4 明治 15 年に刊行された統計年鑑の序文の書き下ろし文

原文【テキスト】(補正後)	書き下ろし文【暫定版】
<p>統計年鑑序</p> <p>統計表何為而製也。將以審國勢民力之大小強弱。以察風俗之淳漓。與智識之高下。以判立法行政之得失。及凡百事物之進退消長也。</p> <p>西賢以之比試金石。或指南針。誠有以也。</p> <p>要在由現象而求其原因。由原因而知天法之所存矣。</p> <p>若夫徒湊泊數字而已。則又何足為統計表乎。</p> <p>雖然物有次序。升高必自卑。行遠必自邇。</p> <p>本邦修統計之學者。既乏其人。彙集材料之法。多所未具備矣。如不歷其次序。而欲遽製完全統計表。</p> <p>譬如欲不由階梯而登樓閣。豈可得哉。</p> <p>此篇。參酌歐州諸國統計年報之體。自土地人口。至財政政事。設科二十一。採擇諸官廳所計查之數。列載三五年。若十數年。以便一目時事之梗概共聞雖有類別排叙。</p> <p>不得其法。事實遺漏。難律以統計之理論者。益亦圖高遠之首途。勢所不免也。覽者幸勿咎焉。若夫成就可充試金石。指南針者。請期諸他日</p> <p>明治十五年三月 統計院幹事安川繁成撰</p>	<p>統計年鑑序</p> <p>統計表は何のために作られるのか。それは国の勢力や民力の大小、強弱をつまびらかにするためであり、生活習慣の良しあしや知識の優劣を調べ、立法行政の得失を判断し、あらゆる物事の栄枯盛衰を見極めるためでもあります。</p> <p>西洋の賢人たちはそれを試金石あるいは方位磁石に例えたが、確かにそのような価値があるのです。重要なのは現象から原因を探り、原因から法則が存在することを知ることです。</p> <p>ただ、単に数字を集めるだけでは、統計表としての価値は十分ではありません。</p> <p>物事には必ず順序があり、どんなに高いところに登るにもまず第一歩からで、どんなに遠くに行くのもまずは一歩から始まります。</p> <p>しかしながら、我が国において統計学を研究する者は、人材が不足しており、判断材料の収集方法も十分に整っていません。</p> <p>順序を踏まずに急いで完全な統計表を作ろうとするのは、階段を使わずに建物の上層に登ろうとすることに等しいです。</p> <p>本書は、欧州諸国の統計年報を参考にし、土地や人口から財政や政務に至るまで、21の科目を設け、官庁で調べたデータを取り上げ、3～5年分若しくは10数年分を、一目で時事の概要を把握しやすいように列記しました。</p> <p>ただ、分類や順序が適切にされていない場合や事実が漏れている場合には、統計の理論を厳密に適用するのは困難です。読む方々には、その点をおゆるしいいただきたい。成果が試金石や方位磁石となりうるものとなることを願いつつ、ぜひ後日にお会いしましょう。</p> <p>明治 15 年 3 月 統計院幹事 安川繁成撰</p>

5 雑感

序文は、安川繁成によるものです。安川繁成³は、明治 4 年 (1871 年) 6 月、岩倉具視が特命全権大使として欧米差遣に際し、日本政表及び日本国勢要覧の編纂⁴を拝命された方です。彼が、政府で初めて政表の業務を担当した責任者であるとみられます。

政表課誌に、明治 4 年に日本政表及び日本国勢要覧の編纂を担当した記事のあと、安川の記事が出てくるのは、明治 7 年～9 年で、この間、政表の事務を兼任していたようです。明治 9 年 2 月末に工部少丞に転任し、その後、統計の担当から離れ、明治 14 年 11 月に統計院幹事 (奏任官) として、再び統計を担当することになりました。統計院は、明治 14 年に大隈重信の建議により、太政官 (内閣の前身) に直属する統計機関として誕生しました。ところが、統計院院長となった大隈重信は、「明治 14 年の

³ 安川繁成のプロフィールは、統計図書館コラム特別編【No. S06】参照

⁴ 【参考資料】(政表課誌明治 4 年の冒頭の記事)

・政表課誌 <https://dl.ndl.go.jp/ja/pid/3023636/1/6> (国立国会図書館デジタルコレクション)


・統計図書館コラム【ピックアップ・コラム】参考資料【号外】【作業用資料】統計院誌テキスト版(暫定版)(3コマ)
<https://www.stat.go.jp/library/pdf/pgogai0102.pdf> (統計局HP)

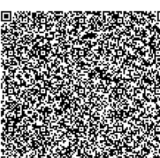
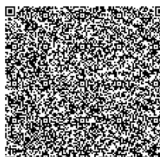
政変」により下野し、これに伴い、矢野文雄（当時統計院幹事兼大書記官）、牛場卓蔵、犬養毅、尾崎行雄も統計院を辞職しました。このため、当時、統計院における一大事業は、統計年鑑の発行であり、準備事務も一時中断することとなりましたが、明治14年11月に会計検査院一等検査官であった安川繁成が統計院幹事を兼任するなど、体制が整備され、翌年3月に「統計年鑑」の刊行に至ったと言っても過言ではないように思います。

その統計年鑑の作成に対する姿勢や労苦が安川繁成の序文から伝わってきます。

特に「若夫徒湊泊数字而已。則又何足為統計表乎。雖然物有次序。升高必自卑。行遠必自邇。」（ただ、単に数字を集めるだけでは、統計表としての価値は十分ではありません。物事には必ず順序があり、どんなに高いところに登るにもまず第一歩からで、どんなに遠くに行くのもまずは一歩から始まります。）、「譬如欲不由階梯而登樓閣。豈可得哉。」（順序を踏まずに急いで完全な統計表を作ろうとするのは、階段を使わずに建物の上層に登ろうとすることに等しいです。）のくだりが印象的です。

参考 統計年鑑の利用案内

戦前の統計年鑑（第1回～第59回）	
【書名の変遷】第1回：「統計年鑑」、第2回～第4回：「第〇統計年鑑」、第5回～第40回：「日本帝国第〇統計年鑑」、第41回～第55回：「第〇回日本帝国統計年鑑」、第56回～第59回：「第〇回大日本帝国統計年鑑」	
第1回～第59回	統計図書館で閲覧可能 （参考）蔵書検索のヒント 統計局HP＞統計図書館・統計相談資料の検索（統計図書館）＞フリーワード検索 ⇒「日本帝国統計年鑑」で検索（ https://www.stat.go.jp/library/opac/top ）
第1回～第59回 （復刻版） 	国立国会図書館デジタルコレクション（国立国会図書館内/図書館・個人送信限定）で閲覧可能 国立国会図書館デジタルコレクション（詳細検索サイト） https://dl.ndl.go.jp/ja/search 【検索条件】閲覧方法：送信サービスで閲覧可能、タイトル：日本帝国統計年鑑 【表示方法】100件ずつ表示、出版日：古い順 ←※上記条件での検索結果
第31回～第59回 	国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可能 国立国会図書館デジタルコレクション（詳細検索サイト） https://dl.ndl.go.jp/ja/search 【検索条件】閲覧方法：ログインなしで閲覧可能、タイトル：日本帝国統計年鑑 【表示方法】100件ずつ表示、出版日：古い順 ←※上記条件での検索結果

日本統計年鑑（第1回～）	
第1回～最新回	統計図書館で閲覧可能 （参考）蔵書検索のヒント 総務省統計局HP＞統計図書館・統計相談資料の検索（統計図書館）＞フリーワード検索 ⇒「日本統計年鑑」で検索（ https://www.stat.go.jp/library/opac/top ）
第60回～最新回	統計局HPで閲覧可能 統計局HP＞統計データ＞日本統計年鑑＞本書の内容 https://www.stat.go.jp/data/nenkan/index2.html ※Excel形式で閲覧可能。第62回以降は電子ブック形式でも閲覧可能。
第1回～第33回 	国立国会図書館デジタルコレクション（国立国会図書館内/図書館・個人送信限定）で閲覧可能 国立国会図書館デジタルコレクション（詳細検索サイト） https://dl.ndl.go.jp/ja/search 【検索条件】閲覧方法：送信サービスで閲覧可能、タイトル：日本統計年鑑 【表示方法】100件ずつ表示、出版日：古い順 ←※上記条件での検索結果
第34回、第35回 	国立国会図書館デジタルコレクション（国立国会図書館内限定）で閲覧可能 国立国会図書館デジタルコレクション（詳細検索サイト） https://dl.ndl.go.jp/ja/search 【検索条件】閲覧方法：国立国会図書館内限定、タイトル：日本統計年鑑 【表示方法】100件ずつ表示、出版日：古い順 ←※上記条件での検索結果